

はしがき

本報告書は、当研究所が令和2～4年度外交・安全保障調査研究事業（発展型総合事業）「大国間競争の時代の日本の安全保障」のサブ・プロジェクトの1つとして実施している研究会プロジェクト「『大国間競争の時代』の朝鮮半島と秩序の行方」の2年目の研究成果を取りまとめたものです。

2020年の国際情勢を特徴づけた対立的な米中関係は、2021年にも緩和の兆しを見せず、より多面的・構造的となりました。北東アジア地域では、北朝鮮が経済的苦境の中でも引き続き核能力の増強と軍備近代化を進め、特に9月以降、新型の弾道ミサイルに加えて巡航ミサイルおよびSLBMを含めミサイル発射活動を活発化・多様化しました。北朝鮮は、バイデン政権による対話の呼びかけに応じる姿勢を見せず、トランプ政権末期からの米朝関係の停滞が長引く中で北朝鮮の核・ミサイル開発が続いており、地域の安全保障環境は厳しさを増しています。こうした中で、日米韓の安全保障面での連携強化がますます重要となっていますが、日韓関係は2021年を通じて改善の兆しが見えず、日米韓の協力にも影響しました。韓国の尹新大統領の誕生がどのような変化をもたらすか注目されています。

本研究会では、韓国・北朝鮮の内政・経済・外交・安全保障（軍事）の各分野に対する情勢分析を通じて、日本の外交・安全保障を考える上でもっとも大きな要素のひとつとなる朝鮮半島の現状を把握し、さらに政策への示唆を引き出すことを目的に据えて種々の活動を行っています。

ここに表明されている見解はすべて個人のものであり、当研究所の意見を代表するものではありません。この研究成果がわが国の外交実践に多く寄与することを心より期待します。本報告書に対する忌憚なきご意見、ご批判をいただければ幸いです。

最後に、本研究に積極的に取り組まれ、報告書の作成に尽力いただいた執筆者各位、ならびにその過程でご協力いただいた関係各位に対し改めて深甚なる謝意を表します。

令和4年3月

公益財団法人 日本国際問題研究所
理事長 佐々江 賢一郎

研究体制

主 査：	小此木政夫	慶應義塾大学名誉教授
副 査：	倉田 秀也	防衛大学校グローバルセキュリティセンター長、教授／ 日本国際問題研究所客員研究員
委 員：	安倍 誠	日本貿易振興機構アジア経済研究所新領域研究センター長
	伊豆見 元	東京国際大学国際戦略研究所特命教授
	奥蘭 秀樹	静岡県立大学大学院国際関係学研究所教授
	阪田 恭代	神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部教授
	西野 純也	慶應義塾大学法学部政治学科教授
	箱田 哲也	朝日新聞論説委員
	平井 久志	慶南大学校極東問題研究所招聘研究委員／ 共同通信客員論説委員
	平岩 俊司	南山大学総合政策学部教授
	三村 光弘	環日本海経済研究所調査研究部主任研究員
	渡邊 武	防衛省防衛研究所主任研究官
委員兼幹事：	市川とみ子	日本国際問題研究所所長
	永瀬 賢介	日本国際問題研究所研究調整部長
	飯村 友紀	日本国際問題研究所研究員
担当助手：	関 礼子	日本国際問題研究所研究助手
	園田 弥生	日本国際問題研究所研究助手

(敬称略、五十音順)

目 次

各章の要旨	……………1
第1章 北朝鮮の「核兵器戦術化」と「エスカレーション阻止」 —— KN-23 と抑止論上の含意	倉田 秀也……………5
第2章 金正恩執権10年、「人民的首領」への道 ——北朝鮮2021年の内政	平井 久志……………19
第3章 緊密化を印象づける中朝関係	平岩 俊司……………61
第4章 2021年の北朝鮮経済社会の様相と今後の展開	三村 光弘……………71
第5章 韓国第20代大統領選挙をどう見るか ——その特徴と着目点	奥蘭 秀樹……………83
第6章 任期末の文在寅政権と次期政権の外交安保政策	西野 純也……………95
第7章 コロナ禍からの復調と対米連携の強化 ——2021年の韓国経済	安倍 誠……………105
第8章 二極化する地域における韓国国防 ——自主の機会とその変容	渡邊 武……………115
第9章 続く対立の中で「新時代」を迎える日韓	箱田 哲也……………127
第10章 米韓首脳会談（バイデン・文会談）とその後 ——2021-22年の米韓関係の動向	阪田 恭代……………137
第11章 北朝鮮「整備・補強戦略」の一考察 ——経済政策における2つの表徴と相関関係そして帰結	飯村 友紀……………151